

ABOUT AMERICA

WOMEN of INFLUENCE



Painted circa 1616.

Painted circa 1616. Pocahontas, daughter to the mighty Powhatan Emperor, was baptized in the Christian faith and married to the "Savior" John Rolfe.



女性実力者の系譜



WOMEN of INFLUENCE

女性実力者の系譜

目次

はじめに.....	1	政府における女性の役割.....	17
新世界への先導役.....	2	ジャネット・ピカリング・ランキン.....	18
ポカホンタス.....	3	ハティー・オフィーリア・ワイアット・キャラウェイ...19	
サカガウエア.....	4	アナ・エレノア・ルーズベルト.....	20
植民地時代.....	5	サンドラ・デイ・オコナー.....	21
アン・マーベリー・ハッチンソン.....	6	ウィルマ・パール・マンキラー.....	22
アン・ダドリー・ブラッドストリート.....	7	世界を広げる.....	23
国家の誕生.....	8	クララ・ハーロウ・バートン.....	25
アビゲイル・スミス・アダムズ.....	9	ジェーン・アダムズ.....	26
マーガレット・コ克蘭・コービン.....	10	ネリー・ブライ（エリザベス・コ克蘭・シーマン）..27	
奴隷制度の鎖を断ち切る.....	11	ロサリン・サスマン・ヤロウ.....	28
ソジャーナ・トゥルース.....	12	シーラ・クランプ・ジョンソン.....	29
ハリエット・タブマン.....	13	マヤ・イン・リン.....	30
女性の投票権.....	14	参考資料.....	31
エリザベス・キャディ・スタントン.....	15		
スーザン・ブラウネル・アンソニー.....	16		

はじめに



近年、世界各地で、商業、地域社会、そして市民生活における女性の貢献が不可欠であることを認識する社会がますます増えている。大統領選挙で投票するアフガニスタンの女性から、エチオピアでマイクロビジネスを立ち上げる女性まで、より大きな平等に向かう世界的な傾向が明らかに見られる。しかしながら、2005年の国連人口基金の声明に述べられているように、「女性の基本的人権の否定は根強く広がっている」。

本書では、米国という国の女性が、米国の社会形成にどのように貢献したかということを取り上げる。ここで紹介する素晴らしい女性たちは、広い荒野で白人開拓者たちのガイドを務めたアメリカ原住民サカガウィア、奴隷制度廃止とすべての人々の平等な権利のために闘ったソジャーナ・

「社会を真に構築するのは
女性である。」

— 作家で奴隷制度廃止活動家の
ハリエット・ビーチャー・ストウ

トゥルース、そして血液中の物質を測定する新たな技術でノーベル医学賞を受賞したロサリン・ヤロウなど多岐にわたるが、彼女たちは皆、自分が社会に貢献できるという信念を持ち、行く先に障害があってもひるまなかった。彼女たちの業績は、どの社会もそこに属する女性たちの才能と知識によって利益を得るということを改めて示すものである。

新世界への先導役

アメリカ植民地とその後の新生アメリカ合衆国の存続は、決して保証されたものではなかった。17世紀初頭の入植者たちには、繁栄する居留地でさえも、食料不足、病気、労役などの厳しい生活環境がつきものだった。バージニア州ロアノークの「失われた植民地」は、彼らが直面した苦難を余すところなく証明している。それから200年後の1800年代には、米国人は新たな領土と太平洋沿岸への道を求めて、比較的居心地のいい都市部を離れてミシシッピ川を渡り、西へ向かうことになる。植民地の存続と西部の領土を開拓する能力は、アメリカ合衆国の確立と発展にとって不可欠であった。この努力の中では、ポカホンタスとサカガウィアという2人のアメリカ先住民の女性が、大きな役割を果たしている。



ポカホンタス。1616年のサイモン・ヴァン・ダー・パッセによる銅版画から



2000年に初めて鑄造されたサカガウィアの肖像が刻印された1ドル金貨

この2人の女性は、文字通りの意味でも、比喩的な意味でも、遭遇した入植者にとって灯台のような役割を果たした。ポカホンタスはまだ幼かったにもかかわらず、最初のヨーロッパ入植者たちと現地のインディアン部族との間の懸け橋となり、1人の開拓者の命を救い、入植者と先住民との間に緊張関係が生まれたときに仲介役を務めた。サカガウィアは、ミシシッピ川の西側の土地を測量する最初の米国の探検隊に参加した。彼女は、部族の言語を話す能力と西部の土地に関する知識を探検隊に貸し、彼らが安全に太平洋岸まで到達し、戻って来られるよう道案内を務めた。

ポカホンタス

平和の象徴

1595-96年頃生まれ、1617年死去

1595年頃、アメリカ・インディアンのアルゴンキン族に生まれたポカホンタスは、伝説の人となった。実際、彼女はアメリカへの初期の入植者たちの生活と自分の仲間たちに、平和をもたらそうと努力した女性である。

ポカホンタスは、現在のバージニア州に当たる地域に居住していたアルゴンキン族の有力な首長、パウハタンの娘だった。誰も確かめることはできないが、彼女が初めてヨーロッパ人入植者と出会ったのは、1607年春、ジョン・スミス船長がほかの入植者とともにジェームズタウンに上陸したときだったかもしれない。スミス自身が後に自分の人生の決定的瞬間について記述しているが、そのとき若きポカホンタスは重要な役割を果たしている。

スミス船長によると、彼はアルゴンキン族に捕らえられて命の危機に瀕した。若きポカホンタスは素早く前に進み出て、スミスと彼を処刑しようとする者の間に割って入り、スミスの命乞いをした。彼女の願いは聞き届けられ、友情が芽生えた。記述では、ポカホンタスは新たな入植者たちと親交を深め、時に食料を持ってきたり、父親からの伝言を取り次いだりした。

入植者とアルゴンキン族との間に緊張関係が生じたとき、サムエル・アーゴールという英国人がポカホンタスを誘拐し、身代金を要求、条件に合意するまで人質にした。アルゴンキン族と入植者の関係が改善した後、ポカホンタスは英国人ジョン・ロルフと結婚した。時期は定かではないが、ポカホンタスは結婚までにキリスト教に改宗し、「レベッカ」という名前をもらった。アメリカ合衆国の未来にとって重要なのは、この結婚が、入植者とアルゴンキン族の緊張関係の緩和に役立ったことである。

1616年、ポカホンタスは、夫と幼い息子とともに船で英国へ向かったが、この旅は広く宣伝される



ポカホンタス

ことになった。ポカホンタスは国王ジェームズ1世と王室の人々に紹介された。彼女が最も感激した瞬間は、何年も前に死んだと思っていたスミス船長と再会したときだろう。悲劇的なことに、ポカホンタスは帰路、致命的な病に罹って1617年3月に亡くなり英国のグレーブゼンドに埋葬された。

ポカホンタスの生涯は短かったが、そのロマンチックな物語は米国人の想像力に訴え続け、多くの神話作りのテーマになった。それは、彼女の一生をもとにした数々の物語、本、絵画、さらには映画 — 最近では「ニュー・ワールド」 — が作られ、また多くの町や校舎、さらには南北戦争の砦にまで彼女の名前が付けられていることに表れている。

サカガウディア

特殊な才能を持つ開拓者

1786年頃生まれ、1812年12月20日死去

現在のアイダホ州に居住していたショショーニ族レムヒー集団の一員だったサカガウディアは、北米大陸の太平洋沿岸に至る地域を調査した1804-1806の年ルイス・クラーク探検隊で、彼女の強さと知力を発揮した。

幼い頃、サカガウディア（この名前は、おそらく「ボート運搬台」または「鳥のような女性」を意味する）は、敵対する部族に捕らえられ、トゥサン・シャルボノという名前のフランス系カナダ人毛皮商に売られたか、あるいは物々交換で引き渡され、後にシャルボノと結婚している。サカガウディアが16歳の頃らしいが、米国西部のダコタ地域にあるフォート・マンダンの近くで息子を出産した。

1805年、彼女の夫は、トマス・ジェファーソン大統領から太平洋までのルートを見つける命を受けた、メリウェザー・ルイスとウィリアム・クラークが率いる新結成の探検隊を支援するために雇われた。複数のインディアン方言を話すサカガウディアは、通訳として、またガイドとして、そしてこの探検隊の平和的な意図をさまざまな部族に示すシンボルとして、すぐに自分の実力を発揮し始めた。さらには彼女の兄が首長を務めているレムヒー集団に遭遇したときには外交官となり、遠征に不可欠なものだった馬や食料、避難所を提供するようレムヒー集団に掛け合った。サカガウディアはこの困難な旅に乳飲み子の息子ジャン・バティストをずっと伴い、世話をした。

遠征後、サカガウディアと夫は、ダコタに戻る前にしばらくセントルイスで暮らした。彼女は1812年に亡くなったと広く信じられているが、自分がサカガウディアだと主張する老女が1884年に死亡している。2000年、ある芸術家が想像で描いた、息子をあやすサカガウディアの姿が米国の1ドル・コインに付け加えられた。



サカガウディア。E・S・パクスサンによる絵

「…われわれの通訳の1人の妻であるこのインディアン女性の姿は、われわれが友好的な目的を持っていることを彼らが確信したしるしだった。なぜなら、この地域では、インディアンの戦闘部隊に女性が同行することは決してないからだ」

1805年10月19日 ウィリアム・クラーク

植民地時代

17世紀に英領北アメリカを植民地化したヨーロッパ人の移民は、旧大陸の社会的、政治的な慣習を伴ってやってきた。しかし、入植者たちは新しい環境、国籍や宗教の多様性、そして英国の伝統である政治的自由の影響を受けて、すぐに英国と距離を置くようになった。米国人としての独自性が芽生え始めたのである。その主な特徴としては、宗教的寛容さの高まり、政治的自由と代議政治への共感、社会的流動性、そして強靱な個人主義などがあった。この時期に、アメリカの文化と教育の基礎もまた確立された。

この時代の何千人もの女性入植者たちは、新世界の開拓地に多大な貢献をした。夫とともに荒野を開墾しながら、子どもを育て、教育し、小屋を建て、生活必需品を作ったり交換したりした。女性たちは、教会と地域共同体の大黒柱だった。



アン・マーベリー・ハッチンソン

ラドンナ・ギュレー・ウォリックが描いたアン・ダドリー・ブラッドストリートの肖像

「アン」と言う名前の2人の女性 — ハッチンソンとブラッドストリート — の功績は、未開の環境から1つの国家を創設するために、どれほどの勇気、自信、そして熱心な学習が必要だったかを如実に示している。ハッチンソンは宗教的自由を提唱した初期の人々の1人であり、国外追放の脅迫を受けながらも自分の信念を貫こうとした。また、詩人のブラッドストリートは、米国文学に独特の音色を与えている新世界での経験を取り上げた最初の文学者である。

アン・マーベリー・ハッチンソン

「市民的自由と宗教的寛容の勇氣ある唱道者」

1591年生まれ、1643年8月-9月頃死去

宗教の自由と言論の自由というアメリカの中核的な概念を最も早く提唱した人物の1人に、アン・マーベリー・ハッチンソンがいる。たいていの資料によると、彼女は英国国教会の反体制派の聖職者とその妻との間に英国で生まれ、1612年に商人のウィリアム・ハッチンソンと結婚して15人の子どもをもうけた。自分の宗教的信条をもっと自由に実践したいと切望した彼女は夫を説得し、自分が敬愛する牧師のジョン・コットンに従って、1634年に、現在のボストンにあたるマサチューセッツ湾植民地にやってきた。

そこから彼女の苦難が始まった。高い教育を受け、自分の本心を率直に語ることを恐れなかったアン・ハッチンソンは、信心深い女性たちを家に招いてコットン牧師の説教をじっくり考えさせる活動を始めた。彼女の評判が高くなると、その集まりにヘンリー・ベーン総督を含む男性も加わるようになった。伝統的な女性の行動範囲から逸脱したことに加え、植民地の牧師を非難し、「心に神の恩寵を持つ人は迷うことがない」と信じていたため、彼女は既成の教会と衝突することになった。教会は、マサチューセッツの新しい総督ジョン・ウインスロップが「非常に弁舌さわやかで、男より大胆」と批判したこの女性の訴追に動いた。ハーバード大学教授ピーター・J・ゴメス師によると、彼女は裁判で、「植民地の男性説教師、神学者、判事の中でも最も優秀な人々を打ち負かした。」自分の信念を強力に弁護したにもかかわらず、彼女は1638年に破門・追放され、家族や信奉者とともにロードアイランドへ移住した。彼女は同植民地建設者の1人であり、後にアメリカ合衆国となるこの土地で、教会と国家を完全に分離し宗教の自由を確立した、最初の人物とみなされている。1642年に夫が亡くなった後、アン・ハッチンソンはニューヨーク州ロングアイランドに移った。悲惨なことに、彼女と、1人を除く彼女の子どもたち全員が、そこでインディアンの襲撃にあって殺された。



アン・ハッチンソンをマサチューセッツ湾植民地から追放する判決の様子を描いた木版画

「市民的自由と宗教的寛容の勇氣ある唱道者」という言葉が、彼女を称えてボストンに建立された彫像の土台に刻まれている。しかし、アン・ハッチンソンが与えた影響に対する最もふさわしい賛辞 — 彼女の理想が最終的に彼女の敵の理想に打ち勝った証拠 — は、「連邦議会は、宗教を樹立したり、宗教の自由な実践を禁止したりする法律を制定してはならない」とする合衆国憲法修正第1条である。

アン・ダドリー・ブラッドストリート

「最近アメリカに現れた第10番目の詩神」

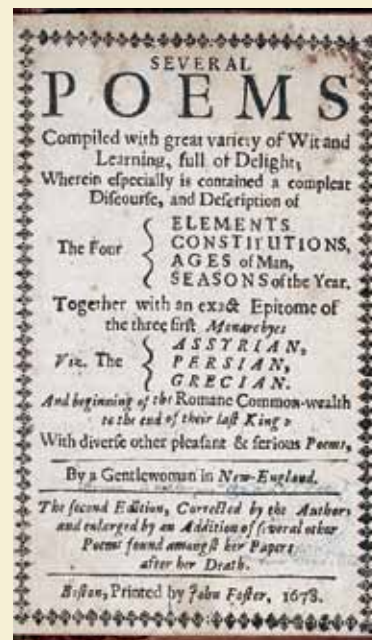
1612年頃生まれ、1672年9月16日死去

アメリカで最初の重要な詩人、アン・ダドリー・ブラッドストリートは、清教徒となった裕福な両親の子どもとして英国で生まれ、16歳でサイモン・ブラッドストリートと結婚した。1630年に、マサチューセッツ湾植民地を建設した清教徒の一員として、両親や夫とともに北アメリカに船でやってきた。当時の多くの女性と違って、アン・ブラッドストリートは本好きの子どもとして成長し、文学、歴史、古典の優れた教育を受けた。彼女は8人の子どもを育て、家事をこなし、植民地の総督である夫のために女主人の役割を務めながら、詩を書いた。

彼女が知らないうちに、義理の弟が彼女の詩を英国に持ち帰った。それらは1650年に、『最近アメリカに現れた第10番目の詩神 (The Tenth Muse Lately Sprung Up in America)』として英国で出版された。これは、彼女の存命中に出版された唯一の詩集だが、皮肉なことに、今日では、最も面白くない作品とみなされている。これらの詩は英国の形而上派詩人の影響を受け、長くて、ときに単調なものが多く、四季を通じて眺めた、宗教などの陳腐なテーマを扱っている。現代の批評家や彼女の作品の支持者たちは、日常生活に題材をとったウィットの効いた詩や、生後1カ月の孫の死に対する感情を詠ったものなど、夫や子どもたちに向けた温かく愛情深い詩を好む。

彼女の作品や、アン・ブラッドストリートについて残っているわずかばかりの記録から、彼女が高い知性と勇気を備えた女性だったことがわかる。彼女は、自分の住む社会が、家事を超えて挑戦する女性を容認しないことを、痛切に感じていた。ある詩の中で彼女は、「私は口うるさい人々に嫌われている。彼らは言う、私の手には針が似合う、と!」と言い放った。そして、彼女は、自分の夫と父親を含む植民地の男性が、反逆者であるアン・ハッチンソンを自分たちの階層から追放しようとしているにもかかわらず、あえてハッチンソンの友人であり続けた。

アン・ブラッドストリートの文学的才能、家族への献身と愛と喪失という普遍的テーマの探求、そして物議



(左) アン・ブラッドストリート。英国リンカーンシャー州ボストンの聖ボトルフ教会のステンドグラス
(右) 『第10番目の詩神』1650年版の口絵

私の親愛なる愛情深い夫へ

もし2つが1つだとしたら、それはきっと私たち。
もし男が妻に愛されるとしたら、それはあなた。
もし妻が1人の男に幸せを感じているとしたら、
私と比べてごらん、女たちよ、できるのであれば。
私はあなたの愛を尊ぶ、すべての金鉱よりも、
あるいは東洋が持つというすべての富よりも。
私の愛は、川も冷ますことができず、
あなたからの愛でしか代償を与えることができない。
あなたの愛に私が報いることなどできない。
天があなたに何倍も褒美をくれるよう、私は祈る。
そうすれば、私たちの生ある限り、愛を買おう。
そして命尽きるとき、永遠に生きられるように。

『私の親愛なる愛情深い夫へ』(Several Poemsより)。
アン・ブラッドストリート。ボストン、ジョン・フォスター、1678年

をかもす友人の側に立つという勇氣は、世界中の女性だけでなく男性にとっても、彼女を魅力的なモデルにしているのである。

国家の誕生

アメリカ合衆国を誕生させた独立戦争（1775年-1783年）の記録の大半を占めているのは、偉大な男性たち — ジョージ・ワシントン、トマス・ジェファークソン、アレキサンダー・ハミルトンなど のような指導者たち — である。これらの建国の父たちは、この若い国が独立宣言の中で表現した理想に法律の形を与えようと努力していた独立直後の難しい時期にも、主役を務めていた。彼らは権利章典を盛り込んだ憲法を制定し、独立した13州が「より完璧な連合」に加わるよう説得し、国家の民主的政府を創り上げた。



1766年、ベンジャミン・ブライスによるアビゲイル・アダムズの肖像



ハーバート・ノーテルが描いたマーガレット・コービン

アメリカの女性たちは、この時代に大きな役割を果たしたが、そのことは最近まで認識されないことが多かった。男性たちが戦争で戦ったり、和平を結んだりしている間に、女性たちの多くは自営の農業や事業の面倒を見ていた。中には男性に伍して戦場に出かけ、病人の看護をしたり、死者を埋葬したりした女性もいた。アビゲイル・アダムズとマーガレット・コービンの物語を読むと、

革命時代の女性が、男性と同じような熱心な愛国者であり、同じように「自由と幸福の追求」を享受することを決意していたことがわかる。ペンを持つアダムズと、大砲を構えるコービンを見れば、今日すべての市民に平等な権利を保障している民主主義国家の創造において、女性が貴重なパートナーであったことがわかる。

アビゲイル・スミス・アダムズ

「女性を忘れないで…」

1744年11月11日生まれ、1818年10月28日死去

アビゲイル・アダムズはアメリカ合衆国第2代大統領の妻であり、第6代大統領の母親だが、その名声はそれだけにとどまらず、教育を受ける権利を含む女性の権利を主張した点にも及んでいる。彼女が書いたおびただしい数の手紙はウィットに富み、愛する国の創生期に対する鮮やかな洞察にあふれている。彼女は、夫の政治思想と経歴を共有し、その形成を助けた。また、所有する農場と財政の管理に長けていた。

マサチューセッツ州ウエーマスに生まれたアビゲイル・アダムズは、当時の多くの女性がそうだったように、正規の教育を受けたことがなかった。それにもかかわらず、小さい頃から熱心な読書家だった。アビゲイルは1764年にジョン・アダムズと結婚した。2人の54年に及ぶ結婚生活は、互いに交わした多数の手紙が示すように、温かく、愛情深く、そして知的に活発なものだった。夫が頻繁に旅に出たため、長期の別居生活を強いられることが多かった。そこで彼女は、生き残った4人の子どもたちの面倒を見ながらで家事をこなし、夫にとって最も重要な政治的同志であり続けた。1776年にアビゲイルは、当時英国からの独立を宣言した大陸会議の一員だった夫ジョンあての手紙の中で、女性の権利に関する最も力強い訴えを行った。「新しい法典を、いずれ作る必要に迫られると私は思いますが、その中では、女性のことを忘れず、女性に対して昔よりも寛容で好意的であるよう望みます」と彼女は書いている。アビゲイルの請願は、米国女性がその後徐々に達成した男女平等を求める、最初の訴えだった。その後、同じ年にジョージ・ワシントンの軍隊が壊滅に瀕したとき、彼女は大胆にも、そうなれば英国軍の相手は「アメリカのアマゾン族だ」と書いた。

アビゲイル・アダムズは、新国家の外交官として赴任する夫に伴い、パリとロンドンで暮らした。アダムズが1789年に米国初の副大統領に、そして1797年に大統領になったときには、女主人として



ファースト・レディであり、作家でもあったアビゲイル・アダムズの版画の肖像

の役割を忠実に果たした。1800年の大統領選でトマス・ジェファソンに敗れたアダムズは、引退してマサチューセッツの家に戻った。そこでアダムズとアビゲイルは余生を楽しんだが、1818年に彼女は亡くなった。その悲しみに際し、将来大統領になる息子のジョン・クインシー・アダムズは、日記の中で、母親に優しい賛辞を捧げた。「女心に美德がとどまるはずもないが、まさに美德こそ母の装身具だった」

マーガレット・コ克蘭・コービン

「自由を求める戦争で兵士としての役割を果たした最初の米国人女性」

1751年11月12日生まれ、1800年頃死去

マーガレット・コ克蘭・コービンは、独立戦争の最初の2年間、夫と手を携えつつ戦地で戦った。彼女は、その勇気と献身が認められ、米国政府の傷痍軍人年金を支給された最初の女性である。

ペンシルベニア州チェンバーズバーグ近郊で生まれたコービンは、インディアンの襲撃で両親を殺され、5歳で孤児になった。21歳のときジョン・コービンと結婚し、夫が大陸軍傘下のペンシルベニア砲兵隊第1中隊に参加すると、それに同行した。従軍したその他の女性と同じく、彼女も料理、洗濯、傷病兵の看護に従事した。1776年11月16日、英国軍およびドイツ兵から成るヘッセン傭兵軍がニューヨークのフォートワシントンを攻撃した。大砲を撃って防戦していた兵士の1人、夫ジョン・コービンは撃たれて死亡した。夫の横で大砲の装填を手伝っていたマーガレットは、夫に代わって装填と発砲を続け、「ぶどう弾」に撃たれて肩に裂傷を負い、胸と顎を負傷した。

仲間の兵士が彼女をフィラデルフィアの病院へ運んだが、傷が完治することはなく、左手が不自由になった。大陸会議は彼女の勇気を称えて、生涯、軍人の退職年金を与えた。彼女は1783年4月に大陸軍から正式に除隊した。隣人たちから「モリー大尉」と呼ばれていたマーガレットは、ニューヨークのウエスト・ポイント近くで死去した。おそらく、50歳の誕生日を迎える前だったと思われる。1926年、「アメリカ革命の娘たち」協会は、彼女の遺体をウエスト・ポイントの陸軍士官学校に埋葬し直した。「自由を求める戦争で兵士



ハーバート・ノーテルによるコービンのスケッチ



ニューヨークのウエスト・ポイント墓地にある
マーガレット・コービンの墓

としての役割を果たした最初の米国人女性」に捧げられたブロンズ板は、今日のニューヨーク市フォートライオン公園にある古戦場の近くで、彼女の勇気と気概を後世に伝えている。

奴隷制度の鎖を断ち切る

19世紀半ばの米国は、自由を愛すると同時に奴隷を所有する、矛盾した社会でもあった。奴隷制度は、東部沿岸部の複数の地域で200年以上も続いており、南部の経済にとっては不可欠な要素だった。しかし、19世紀も終わりに近づくと、奴隷制度廃止運動はますます活発になり、米国の理想と南部での奴隷制度の慣行との間の大きな落差に焦点が当たるようになった。そして緊張が高まった結果、1861年には南北戦争の勃発へとつながった。エイブラハム・リンカーンが率いた北軍が勝利し、米国で奴隷制度が廃止されるまでに、血みどろの戦争が4年間続いた。



ハリエット・タブマン



ソジャーナ・トゥルース

女性は奴隷解放運動で重要な役割を果たし、何人かは指導者として際立つ働きをした。後段で紹介する元奴隷ハリエット・タブマンとソジャーナ・トゥルースは、奴隷制度の邪悪さを、身をもって証明した。もう1人、白人女性のハリエット・ビーチャー・ストウは、1852年に有名な小説『アンクル・トムの小屋』を著した。この小説がきっかけとなり、特に北部の若い世代の有権者の間で、奴隷制度廃止の大義が熱狂的に広がった。この結果、ストウは熱心な奴隷制度廃止論者として歴史に刻まれることになった。そして、タブマンやトゥルースと同じように有名人となり、多数の集会で奴隷制度に反対する講演を行った。

黒人が解放され、アフリカ系米国人の男性に選挙権が与えられたことにより、多くの女性は自分たちが社会で不平等な立場にあることを認識するようになった。エリザベス・キャディ・スタントン、タブマン、トゥルースなどの奴隷解放論者たちは、後に、新興の女性運動の提唱者となった。

時代は変化し、女性たちは自らの意志で人生を決定する機会をつかんだ。大きな個人的犠牲と忍耐によって、タブマンやトゥルースのような女性たちは、奴隷制度という暴虐な行為からの解放と、すべての人のための人権という、高尚な目標の達成に生涯を捧げたのである。

ソジャーナ・トゥルース

奴隷解放活動家、女性の権利の擁護者

1797年頃生まれ、1883年11月26日死去

熱心な奴隷制度廃止論者であり、女性の権利の提唱者でもあったソジャーナ・トゥルースが自分の意見を主張するようになったのは、1840年代初め頃である。彼女は奴隷として生まれ、イザベラ・ボームフリーと名づけられた。彼女がソジャーナ・トゥルース（滞在者・真実）と改名したのは、「国のいろいろな場所を旅して、人々に彼らが犯した罪を示し、彼らの道しるべとなる」よう、神がお召しになったと感じたからである。

若い頃ニューヨーク州アルスター郡で過酷な生活を送った後、1827年7月4日にニューヨーク州が奴隷制度を廃止するまで、彼女は連続して5人の主人に仕えた。彼女はその後ニューヨーク市に移り、奴隷制度の邪悪さについて意見を述べ始めた。トゥルースは身長およそ6フィート（約180センチ）の堂々たる体格と、強く鳴り響く声を持ち、奴隷制度による虐待と自分が耐えてきた困難を生き生きと描写した。

トゥルースは独学で学び、機転とカリスマ性を備え、大勢の聴衆を引きつけた。一度聴衆の中から、あんたの奴隷制度反対のスピーチなどノミに食われたほどの効果もない、という野次が飛んだとき、トゥルースは、「たぶん、そうでしょう。でも神の思召しで、私はあなたを掻き立てさせるでしょう」と答えた。

女性参政権を強く支持するソジャーナ・トゥルースは、強い黒人女性とすべての強い女性にとっての、全国的なシンボルとなった。1851年にオハイオ州アクロンで開催された「女性の権利会議」での「私は女ではないのか」という彼女の演説は、女性の権利に関する古典になった。

南北戦争の間、彼女は黒人志願兵連隊のための補給品を集め、またさまざまな政治運動に関わった。彼女の努力を称えて、1864年、リンカーン大統領は彼女をホワイトハウスに招いた。同年、彼女は全米自由人救済協会顧問に任命され、すべてのアフリカ系米国人の環境改善に努めた。



奴隷制度廃止論者ソジャーナ・トゥルースとともに聖書を読むエイブラハム・リンカーン。ボルチモアの黒人社会は、奴隷解放宣言を記念してこの絵を大統領に贈った

南北戦争後、彼女は、元奴隷たちに土地を分配するという、自分の夢だったプログラムへの支援を得るために最後の活動を始めたが、成功しなかった。このときまでに彼女は、ミシガン州バトルクリークに居を構えており、1883年にこの地で家族と友人に囲まれて亡くなった。

ソジャーナ・トゥルースの生誕200周年を記念して、NASAのジェット推進研究所は、火星探査機の名前を「ソジャーナ」とすることを発表した。19世紀の奴隷制度廃止論者であり女権擁護の急先鋒であった人にふさわしい賛辞である。

ハリエット・タブマン

「地下鉄道」の指導者

1820年頃生まれ、1913年3月10日死去

メリーランド州ドーチェスター郡で奴隷として生まれたハリエット・タブマンは、勇敢にもペンシルベニア州フィラデルフィアの安全な場所まで走って逃げ込むことにより奴隷制度と決別した、驚くべきアフリカ系米国人の女性である。1850年に逃亡奴隷法が成立して脱走奴隷を助けることが違法になったとき、タブマンは、奴隷を自由にする活動をしている人々の組織である「地下鉄道 (Underground Railroad)」に加わる決心をした。

「地下鉄道」は地下にあるわけでもなく、鉄道でもなかったが、極めて抑圧的な南部からの逃げ道として、奴隷制度廃止論者や元奴隷たちが秘密のうちに作り上げた、一連の家、トンネル、抜け道だった。ハリエットはこれらのルートを知っていたため、一度も捕まらず、また「乗客」を無事に送り届けるのに失敗したこともなかった。

タブマンは、南北戦争に至るまでの年月に、300人の奴隷たちを「地下鉄道」に案内した。タブマンは、奴隷制度がある地域へ19回も危険な旅をした。そのうち1回は、70歳になる自分の両親を救い出してニューヨーク州オーバーンへ連れてくる旅だった。そして、オーバーンは、彼女の故郷にもなった。1860年、集中的に各地を巡る講演旅行を開始し、奴隷制度の廃止だけでなく、女性の権利の再定義をも訴えた。

1861年に南北戦争が勃発すると、彼女は連合軍の看護師、スパイ、斥候として任務にあたった。「地下鉄道」の「車掌」だった時の経験から、地方の事情に詳しくあったため、彼女は斥候として特に高く評価された。

戦後、タブマンは政府年金の支給を拒否され、何年間も金銭的に苦しい生活を送った。手続きの非効率性と、おそらくは人種差別が残ってい



ハリエット・タブマン（左端）、彼女の「地下鉄道」の斥候としての才能により、南北戦争以前に300人の奴隷を解放することができた



ポール・コリンズによる、ハリエット・タブマンの「地下鉄道」の絵

たことが原因だった。しかし彼女は、女性および黒人の地位の向上と、孤児や貧しい高齢者の保護にまい進した。

最終的にタブマンは合衆国陸軍から少額の年金を受け取ったが、彼女はそのほとんどを使って、1908年に、高齢者と貧困者の家として、オーバーンに木造の施設を建てた。彼女は家で働き、1913年に亡くなるまでの数年間は、彼女自身もそこで世話になった。

女性の投票権

19世紀に女性の平等の権利を確保しようとする運動が始まったのは、ひとつには高い教育を受けた女性たちが他の社会問題に取り組むようになったためであった。1840年に、エリザベス・キャディ・スタントンとルクレシア・モットという2人の女性が、ロンドンの反奴隷制会議で出会った。会議に出席したスタントンとモット、そしてその他の女性たちは、女性であるがゆえに会議の活動に参加することを許されなかった。彼女たちはこれに抗議して会議をボイコットし、独自に女性の権利をテーマとする同様の会議の計画を始めた。それは8年後にニューヨーク州セネカフォールズ市で実現した。

このセネカフォールズ会議で草案が作成された「感情宣言」は、1776年に米国が英国から独立した際の独立宣言を基盤とするものであった。感情宣言は、この運動の趣旨として、女性が離婚する場合に親権を得る権利、虐待をする夫に対して法廷で証言をする権利、女性がさまざまな職業に就き、その給料を夫に渡さず自分が保持する権利、そして当時最も論議を呼んだ、女性の投票権を打ち出した。

スタントン、そして彼女と同じく著名な19世紀女性運動の同志スーザン・B・アンソニーは、社会を変えるにはまず世論を変えなければならないという政治的な先見の明を持っていた。そして2人とも熱心にその理念を説いた。その手段として、スタントンは執筆し、アンソニーは個人的なリーダーシップを発揮するとともに精力的に各地を講演して回った。また、この2人の女性は、特定のグループの自由と解放は、実質的にあらゆるグループの自由と解放を意味することを認識していた。彼女たちは、黒人奴隷制の廃止を主張することによって、女性も元奴



エリザベス・キャディ・スタントン（左）と
スーザン・B・アンソニー（右）。1870年代頃

隷と同様に、法律で守られた明確な権利を与えられるべきであるということを、19世紀末の米国民に理解させようとした。さらに2人とも、社会の構成員全員が自らのニーズを効果的に表現するためには、全員のための公正で自由な選挙が必要であることを認識していた。

エリザベス・キャディ・スタントン

「女性参政権の母」

1815年11月12日生まれ、1902年10月26日死去

エリザベス・キャディ・スタントンは、米国および世界中の女性の権利拡大を背後から推進した大きな力の1つである。特に彼女は、19世紀の女権運動の創始者、指導者だった。そうした運動が1920年の米国における女性参政権の実現につながっていった。

1815年に、ニューヨーク州の著名な州議会議員兼判事を父として生まれたスタントンは、父の指導で非公式に法律を学び、男性と女性を同等に扱うように当時の法律を改革することが天職だと、早いうちから考えていた。1840年、彼女は、弁護士、演説家、そして奴隷制度廃止論者であるヘンリー・ブルースター・スタントンと結婚した。この結婚によって、彼女は政治的に進歩主義的なサークルにさらに深く入り込むことになった。1848年、エリザベス・スタントンは、既婚女性の財産権を守る法律を制定するよう、ニューヨーク州議会を説得するために尽力した。そして、その年の7月には、ニューヨーク州セネカフォールズで開催された、米国で、そしておそらく世界で初めての女性の権利会議を、女権運動家のルクレチア・モットとともに、先頭に立って運営した。この会議は、女性の権利を訴える数々の決議を可決し、注目すべきことに、米国独立宣言をモデルにした「感情宣言」で、女性参政権（選挙権）を要求した。

エリザベス・スタントンは1842年から1859年までの間に7人の子どもを生んだが、これによって仕事への情熱が衰えることはほとんどなかった。南北戦争の間、彼女と夫は奴隷制度の廃止を求める活動を行った。その後は、女性参政権の問題に力を入れないことを理由に、ほかの進歩主義者と袂を分かった。

1850年頃スタントンは、同じく女性の投票権を求める運動のリーダーを務めていたスーザン・B・アンソニーと親交を結ぶようになった。2人の50年に及ぶ協力関係は、スタントンの演説家、著者



エリザベス・キャディ・スタントンの著書『Eighty Years and More: 1815-1897』からの写真

としての優れた技能と、アンソニーのまとめ役、戦術家としての才能が強みだった。2人のパートナーシップについてスタントンは、「私が雷電を作って、彼女がそれを放った」と言っている。スタントンは全米女性参政権協会の会長として有名になり、母性や離婚法、そして家庭・結婚・生命を破壊すると感じている人もいた酒の社会的影響などのテーマで、講演活動も行った。1880年に引退した後、アンソニーと共著の形で女性参政権の歴史を書いた。彼女は、その数十年後に実現することとなった、女性の政治的・社会的平等に向けて国が取り組むべき課題のリストを完成させた後、1902年に死去した。

スーザン・ブラウネル・アンソニー

女権運動の「比類なきまとめ役」

1820年2月15日生まれ、1906年3月13日死去

エリザベス・キャディ・スタントンと同じく、スーザン・B・アンソニーも北東部出身で、意志強固な父親の指導の下で人生を歩みだした。マサチューセッツ州アダムズ生まれのアンソニーは、ビジネスマンとして成功したクエーカー教徒の奴隷制度廃止論者の家庭で育った。伝えられるところによると、彼女は3歳で読み書きができたようで、英才児として知られていた。

アンソニーは20代半ばに教師になり、最終的には地元の学校の校長としてニューヨーク州ロチェスター地区に落ち着いた。そして、飲酒を社会と家庭の不幸の根源とみなし、「酒瓶」に反対する政治的・宗教的運動である禁酒運動に引き込まれていった。男性が支配する組織では過小評価され、発言できないと感じたアンソニーと一部の友人たちは、「ニューヨーク州女性禁酒協会」を設立した。1850年頃、アンソニーはエリザベス・キャディ・スタントンと出会い、彼女に従って女性の権利を求めるより大規模な活動を行うようになった。

スタントンと違い、アンソニーは一度も結婚せず、自分の時間とエネルギーのすべてを政治活動に費やした。1856年から1861年の南北戦争の勃発まで、「米国奴隷制度廃止協会」の一員として働き、戦争中も奴隷解放のために引き続き尽力した。その後アンソニーは、スタントンとともに女権の請願活動に従事し、進歩主義的雑誌である「ザ・レボリューション」を創刊し、「ニューヨーク勤労女性協会」の設立を助けた。1870年に合衆国憲法修正第15条が採択され、「人種、肌の色または過去における労役の状態」に関わらず、すべての市民に投票する権利が保障されたが、この中に「性別にかかわらず」と言う言葉は含まれなかった。この状況に啞然としたアンソニーは直接的な行動に立ち上がり、女性の一群を率いてロチェスターの投票所に向かった。



スーザン・B・アンソニー、1899年

逮捕され、裁判を待つ間に、彼女は世間の注目を利用して講演旅行を始めた。1873年、彼女は再び市民的不服従運動を行い、またも投票を試みた。彼女は女性であることを理由に自分の裁判で証言する権利を拒絶され、軽い罰金を科せられたが、その支払いを拒否した。この戦いと、それに伴う世間の注目に鼓舞されて、彼女は米国人女性の投票権を実現するために、全国規模の組織を通じて、また東部諸州や西部の準州での個人的な講演旅行によって、これまで以上に活発に活動した。

アンソニーは1888年に「国際女性会議」、1904年には「国際女性参政権同盟」を設立して、ロンドンとベルリンで会合を開き、その活動を国際的レベルに押し上げた。彼女はスタントンの死から4年後の1906年に亡くなったが、彼女たちの仕事が開き、米国人女性に投票権を認めた、合衆国憲法修正第19条が1920年に承認されるに至った。

政府における女性の役割

20世紀前半に、米国は2つの世界大戦に勝利し、恐慌を克服して、世界の大国へと変身した。経済および社会の改革により、労働者家庭の生活水準が向上し、アフリカ系米国人は、ようやく人種の平等を得られるかもしれないという希望を強めた。



ジャネット・ランキン



ハティー・キャラウェイ



エレノア・ルーズベルト

そのころ女性も、妻、母、そして世話をする人という従来の役割から外れていると長年考えられてきた分野で、画期的な前進を始めていた。多くの女性が大学に行ったり、第2次世界大戦で戦っている男性の代わりに工場で働いたりした。1920年に選挙権を獲得したことで、女性は政治・政府においても数々の勝利を収めるようになった。女性が全米で選挙権を与えられた1920年より何十年も前に女性による投票を認めていた米国西部のモンタナ州では、ジャネット・ランキンが女性初の連邦議会議員に選出された。間もなく、何百人、そして何千人もの女性が、市・郡・州・全国レベルの選挙に立候補した。例えば、コネティカット州では、エラ・グラッツが自分の力で州知事に当選した初めての女性となった。またウィルマ・マンキラーは、アメリカ原住民国家で初の女性首長となった。シャーリー・チゾムやエリザベス・ドールのように大統領または副大統領に立候補した女性も数人いる。さらに、エレノア・



サンドラ・デイ・オコナー



ウィルマ・マンキラー

ルーズベルトが国連代表に、サンドラ・デイ・オコナーが最高裁判事に、そしてコンドリーザ・ライスが国務長官にそれぞれ任命され、こうした多くの著名な女性たちの才能が、米国そして海外で政治の世界を豊かにしてきた。しかし、そうした女性たちの活躍の道を切り開いたのは、ジャネット・ランキンやハティー・キャラウェイのような先駆者たちであった。

ジャネット・ピカリング・ランキン

女性初の合衆国連邦議会議員

1880年6月11日生まれ、1973年5月18日死去

ジャネット・ランキンは、1917年4月2日に連邦議会下院で議席を獲得した。両院を通じて選出された初の女性議員だった。全米の女性が投票権を獲得する3年前だった。

モンタナ州で生まれたランキンは、政治に強い関心を持つ、エネルギッシュな若い女性で、それまでの生涯を女権拡張と平和の大義に捧げた。彼女は、ニューヨーク慈善学校（後のコロンビア大学社会福祉事業大学院）で学位を取得し、ワシントン州シアトルでソーシャルワーカーになった。自分が担当する福祉受給者の実情を知るために、彼女はしばらくの間、お針子として働いた。ランキンは1910年にワシントンで起きた参政権運動に参加して、1914年にはモンタナ州で女性参政権運動を指揮して成功を収めた。モンタナ州で新たに選挙権を得た女性たちの支援を受け、ランキンは、1916年に共和党から連邦議会に選出された数少ない議員の1人となった。

米国女性のために発言するのが自分の「特別な使命」だと感じたランキンは、女性と子どもを助ける法律の草案作成に貢献し、女性に投票権を与える憲法改正を支援した。しかし彼女は、1920年にすべての米国人女性に選挙権が与えられるまで、連邦議会にとどまることができなかった。彼女は1918年に上院議員に立候補したが、有権者はこれを拒否した。おそらく、その1年前に、米国の第1次世界大戦参戦に反対票を投じたのが原因だった。

ランキンは社会事業と、全米消費者連盟、婦人国際平和自由連盟などの組織の改革に戻った。そして、1919年にチューリッヒで開催された第2回国際女性会議に参加した。1940年に連邦議会に再選されたランキンは、真珠湾攻撃の後、連邦議会ですべての1票で対日戦への反対票を投じた。この不人気な1票で政治生命を終えたランキンは、余生を自分の好きな活動に捧げた。例えば、86歳のと



ニューヨーク市ユニオンスクエアでの集会で演説する
ジャネット・ランキン（1924年9月）

きには、ベトナム戦争に反対するワシントンの大行進に参加した。

ジャネット・ランキンは、女性の才能と知識を、よりよい社会の建設に生かすことの重要性を理解していた。「男と女は右手と左手のようなものだ。両方を使わないのは意味がない」と彼女は述べた。彼女は遺言の中で、女性が教育を受けて社会の向上に貢献できるようにするための資金を残した。この意志の固い、献身的な米国人が残した多くの遺産の1つであるジャネット・ランキン財団は、1976年に設立認可を得て以来、低所得層の女性に教育の機会を提供し続けている。

ハティー・オフィーリア・ワイアット・キャラウェイ

連邦上院議員に選ばれた最初の女性

1878年2月1日生まれ、1950年12月21日死去

ハティー・キャラウェイは、自分自身の力で米国上院に選出された初めての女性である。

彼女はテネシー州出身で、ディクソン・ノーマル・カレッジで学位を取得した。そこでサディマス・H・キャラウェイと出会って1902年に結婚し、3人の息子をもうけた。一家はアーカンソー州に移り住み、そこからサディマス・キャラウェイは1912年に連邦下院、1920年に連邦上院に立候補してそれぞれ当選した。1931年にサディマスが突然亡くなると、アーカンソー州のハービー・パーネル知事は、夫に代わってハティーを上院議員に指名した。1932年1月12日に特別選挙が行われ、彼女の指名が承認された。ハティー・キャラウェイが選出される前に1人だけ、レベッカ・ラティマー・フェルトンという女性が、やはり上院議員の死去により議員を務めたが、それは儀礼上の任命であり、1日限りのことだった。

自分の考えを遠慮なく口にするジャネット・ランキンと対照的に、ハティー・キャラウェイは、一度も演説をせず、また、大衆受けしない主義を主張することもなかった。彼女はそれほど自制していたため、「寡黙なハティー」というニックネームまでもらっていた。しかしながら、彼女は勤勉な公僕であり、自分の責任を重く受け止め、高潔という評判を確立した。民主党員である彼女は、退役軍人と労働組合のために、常にフランクリン・D・ルーズベルト大統領とニューディール法を支持した。

「寡黙なハティー」が沈黙を破って人々を驚かせたのは、1932年5月9日のことだった。上院で初の女性議長を務めるよう要請された彼女は、そのために集まってきた記者たちに対して、再選を目指して立候補すると発表した。彼女のために懸命に選挙戦



ハティー・キャラウェイ上院議員。左はジョセフ・ガフィー上院議員。
1936年2月26日にワシントンDCで開かれた上院委員会の公開会合で、
女性初の議長を務めた

を手伝ったルイジアナ州のヒューイ・ロング上院議員のおかげもあり、彼女は再選を果たした。1940年代には、男女平等憲法修正条項案の共同提案者として署名した。彼女はウィリアム・フルブライトに敗れて、1945年に上院を去った。いつもの控えめな表現で、彼女は自分が4位だったことを「国民の声です」と総括した。

しかし、ハティーの公職での経歴は終わらなかった。ルーズベルトは彼女を米国連邦労働者補償委員会に、そして後に労働者補償上告委員会に任命した。1950年1月、彼女は脳卒中に襲われて辞職し、その年の末に死去した。彼女の書いた手紙、そして彼女の在勤期間をたどる記録が、『寡黙なハティーが語る—ハティー・キャラウェイ上院議員の個人日記 (Silent Hattie Speaks: The Personal Journal of Senator Hattie Caraway)』というタイトルで出版されている。

アナ・エレノア・ルーズベルト

「世界のファースト・レディ」

1884年10月11日生まれ、1962年11月7日死去

ニューヨーク市の裕福で有力な家庭に生まれたアナ・エレノア・ルーズベルトは、夫のフランクリン・デラノ・ルーズベルトの大統領任期中（1932-1945年）に、ファースト・レディの役割を大きく変えた。彼女は、権力を持たない者（少数民族、女性、貧しい人々、弱い立場にある人々）に発言権を与えることによって、世界中の何百万もの人々にインスピレーションを与えた。一方、人権、公民権、そして女性の権利に献身する彼女の活動は賛否両論を呼んだ。

エレノア・ルーズベルトは10歳で孤児になり、内気で自信のない少女だった。彼女は一家の習慣を引き継いで社会奉仕に携わり、セツルメント・ハウスの教師を務めた後、1905年に外向的ないこのフランクリンと結婚した。2人の間には6人の子どもが生まれたが、1人は幼時に死亡した。1910年に夫がニューヨーク州議会上院議員に選出されたことで、エレノアの政治的協力者としての人生が始まった。

エレノア・ルーズベルトの伝記作者の間では、彼女が1918年に、夫がエレノアの私設秘書と浮気をしていることを発見した心的トラウマが、社会活動にのめり込む原因となったという見方もあるが、一方、彼女の受けた教育と交友関係の広がり社会活動のインスピレーションになったという意見もある。1921年にフランクリン・ルーズベルトがポリオに罹ってから、エレノアは彼の政治家としてのキャリアと彼女自身の社会正義の理想を推進するため、ますます熱心に政治に取り組むようになった。

ルーズベルトが大統領に当選すると、エレノアは大恐慌に打ちのめされていた米国の各地を訪問して回った。そして、各地の実態を夫に報告するとともに、女性や少数民族の平等の権利、子どもの福祉、住宅政策改革などをたゆまず促進し続けた。彼女は大統領夫人として初めて、定期的に記者会見を行い、各紙に配信されるコラム「My Day」を書き、ラジオ解説番組に出演し、また講演旅行に出たり政治大会で演説をしたりもした。彼女はシンボリズムを非常に有効に使った。例えば1939年に愛国婦人団体「Daughters of the



エレノア・ルーズベルトは、世界人権宣言に関する業績を自らの最大の遺産と考えていた

American Revolution (DAR — アメリカ革命の娘たち)」が、アフリカ系米国人の歌手マリアン・アンダーソンが同団体のホールで公演することを彼女の人種を理由に禁じたとき、エレノアはDARを脱退し、代わりにアンダーソンがリンカーン記念堂で歌うことを提案した。そのコンサートは7万5,000人の聴衆を集めた。

フランクリン・ルーズベルトの死後、ハリー・トルーマン大統領はエレノアを国連代表に任命した。彼女は、国連人権委員会の委員長を務め、世界人権宣言の草案作成と採択に主導的な役割を果たした。1961年には、ジョン・F・ケネディ大統領により「女性の地位に関する大統領委員会」の委員長に任命され、1962年に死去するまでその任を務めた。

トルーマン大統領は、ルーズベルト夫人を、尊敬を込めて「世界のファースト・レディ」と呼んだ。しかし、彼女自身は自分の業績について、「私はその時々でしなければならないことをしてきただけです」と謙虚に語っている。

サンドラ・デイ・オコナー

女性初の最高裁判事

1930年3月26日生まれ

半世紀後にロナルド・レーガン大統領によって最高裁判事に任命されることになる女性は、テキサス州エルパスで生まれ、アリゾナ州南東部のレージー・B・ランチで育った。そして法律大学院を卒業した後、間もなくジョン・ジェイ・オコナー3世と結婚し、3人の息子の母親となった。

オコナーは、スタンフォード大学の法律大学院を出ていたにもかかわらず、女性であるという理由で、法律事務所に入ることができなかった。これは1950年代にはふつうのことであった。彼女は、カリフォルニア州サンマテオ郡の副検事になった。何年も後に彼女は最初の仕事について、「私がいかに公職に向いているかということを見せてくれて、私の人生のバランスに影響を及ぼした」と述べている。

オコナー一家はドイツへ、そして次にはアリゾナ州へ引越し、その間彼女はいくつもの職に就き、子どもたちを育て、共和党員として政治に関わるようになった。1969年には州議会上院議員に任命され、その後2度にわたって同議席に再選された後、1972年に上院院内総務となった。1975年には公選でマリコパ郡最高裁判所の州判事に選出された。その4年後には、アリゾナ州知事によって州控訴裁判所判事に任命され、そして1981年8月19日、レーガン大統領がオコナーを正式に最高裁判事に任命した。オコナーは、公職者としての経験を最高裁にもたらしただけでなく、公職に選出されたことのある唯一の現職判事となった。

最高裁判事としてのオコナーは、その現実主義から歩み寄りの術に長け、5対4の判決では彼女が「浮動票」となることが多かった。オコナーは多くの人たちから、全米で最も大きな権限を持つ女性と見なされた。オコナーの判決理由は、連邦主義 — 憲法に基づく



(左) サンドラ・デイ・オコナー。
2004年10月27日、ジョージタウン大学にて
(上) 家族とともに合衆国最高裁判所長官
ウォレン・バーガーと写真に収まるオコナー

州政府と連邦政府の権限分担 — について、また差別是正措置、死刑、妊娠中絶といった論争を呼ぶ課題について、司法上の指針を提供した。その間を通じて、彼女は、最高裁初の女性判事として、彼女の才能ではなく性別だけに注目する人たちもいること、そして一方、逆説的ではあるが、彼女が最高裁判事に任命されたことが米国女性全体の業績を代表するものであることを忘れなかった。「私が最高裁で行使する権限は、私の性別ではなく私の論拠の力に依存するものです」とオコナーは語っている。しかし同時に、「我が国の人口の半数は女性であり、女性が権限のある高官の職に就くのを認めることは、他の女性にとって意味のあることです」とも主張している。

オコナー判事は、2006年1月31日、最高裁判事の職を引退した。現在は、次世代の米国民を市民権に備えて育成する団体「Campaign for the Civic Mission of Schools」の共同委員長を務めている。

ウィルマ・パール・マンキラー

アメリカ原住民国家初の女性首長

1945年11月18日生まれ、2010年4月6日死去

ウィルマ・マンキラーは、チェロキー・ネーションで初めての女性首長に選出される前に、「チェロキーの少女たちは、自分が大きくなったら首長になるなどとは考えたこともなかったでしょう」と語った。

米国有数の大規模な部族の首長となり、部族の人々のために活発な共同体構築プログラムを確立したウィルマ・マンキラーは、オクラホマ州タレクアで生まれた。マンキラー族によると、その名字はチェロキーの軍隊における位を表すものであるという。マンキラーの少女時代に、米国政府のインディアン転住政策によって、一家はサンフランシスコに強制的に移住させられた。そこで彼女は1960年代末のアメリカ原住民活動家の運動に参加した。これは、60年代の第3世界における国家主義の発展、そして米国内の公民権運動からインスピレーションを得た運動であった。若い男性のグループが、アメリカ原住民が受けた不当な扱いに抗議して18か月間にわたってアルカトラズ刑務所を占拠した際、マンキラーは彼らを支援し弁護するための資金を集めた。こうした体験を通じて、彼女はアメリカ原住民の社会的・経済的な問題、そして独立した部族国家と連邦政府との不安定な関係に対する考え方を形成していった。

マンキラーは、チェロキー・ネーションで働くようになり、地域社会開発局を設立し、またベル水道・住宅プロジェクトのようなプログラムを開発した。ベルプロジェクトでは、対象となるアメリカ原住民の各世帯が、水道管を1マイルずつ設置する責任を負担し、そのための資金を調達した。このプロジェクトは大成功を収め、多くの家庭に初めて水道が引かれた。彼女の指導力を高く評価した当時の首長ロス・スイマーは、1983年に彼女が副首長に立候補することを要請した。選挙運動中にマンキラーは殺害の脅迫を受けた。また女性が部族の指導者となることに反対する人たちが彼女の車のタイヤを切り裂いたりした。しかしスイマーとマンキラーは選挙に当選し、1985年にスイマーが辞任するとマンキラーが首長の地位に就いた。1987年には自分の力で首長



チェロキー・ネーション
首長への就任が
公表された日の
ウィルマ・マンキラー
(1985年)

選に当選し、その後も2度にわたり大差で当選を果たしている。

マンキラーは、アメリカ原住民は「自らの経済問題を解決する」べきであるとの信念の下に、22万人以上の人々を統治し、年間7,500万ドルの予算を管理した。1990年に彼女が署名をした画期的な米国—チェロキー・ネーション自治協定は、チェロキー部族が、それまでインディアン局が部族のために管理していた連邦資金を直接管理できるようにしたものであった。また彼女は、税制調査会を設置し、チェロキー・ネーションの裁判所、教育、警察制度を改善した。

マンキラーは1995年の首長選に再出馬しなかったが、これは2度の腎臓移植など健康上の理由によるものではないかとみられている。しかし彼女は、今でも20世紀の最も著名なチェロキー・インディアンであり、1998年に自由勲章を受章したほか、いくつもの賞を受けている。

世界を広げる



クララ・バートン



ジェーン・アダムズ



ネリー・ブライ
(エリザベス・コ克蘭・シーマン)

米国の歴史を通じて、女性たちは、投票権、教育の機会均等、そして有給の仕事など、ほとんどの男性にとっては当然のことだった権利と機会を獲得するために長年努力をしてきた。

植民地時代にまでさかのぼると、当時は女性が正式に教育を受けることに反対されるのがふつうだった。しかし1821年に、エマ・ハート・ウィラードが、ニューヨーク州トロイの市民たちから資金を得て、全米初の女性のための神学校、トロイ女子神学校を設立した。同校は、現在なら大学レベルと見なされる科学、数学、文学、そして歴史の講座を提供した。1833年には、男女共学のオーバーリン大学が開校し、初めて女性に高等教育の学位を提供する学校となった。1861年には、初めての私立リベラルアーツ女子大学としてバツサー大学が設立された。19世紀後半に入ると、他の共学の大学にも女性が入学するようになった。

しかしながら、20世紀に入ってからかなりたってからも、政府・政治だけでなく多くの分野が女性に対しておおむね閉じられていた。物理学者のロサリン・ヤロウや最高裁判事のサンドラ・デイ・オコナーのような傑出した女性たちでさえも、少なくとも最初は、科学・法律・数学など「男性的」とされていた分野で大学に入学したり、自分の能力と教育に見合った仕事に就いたりすることが難しかった。

しかし、それでも意欲的な女性たちが、野心と理想を追求するために教育面でのハードルなどの障害を乗り越えていった。20世紀には女性たちが着実に労働力として進出し、それまで女性には閉じられていた職業で優れた能力を発揮している。今も格差は残っているが、多くの分野で女性は著しい進歩を遂げた。こうした進展を示す米国国勢調査局のデータが2つある。まず教育の分野で、



ロサリン・ヤロウ



シーラ・ジョンソン



マヤ・イン・リン

2005学年度に発行される予定の学士号の59%、修士号の60%が女性に対するものと予想されている。また、2002年には女性起業家が社長である会社の収益が総額9,408億ドルとなった。

ここで取り上げる女性たちは、過去150年間に開拓者、達成者となってきた多くの女性のごく一

部である。こうした女性たちは、社会を変えること、そして自らの才能を最大限発揮することを強く願っていた。彼女らは、権力に対して立ち上がる勇気と、必要ならば論争も受けて立つ勇気を持っていた。そして、その過程で、それぞれの地域社会、国家、また世界を社会的・経済的・科学的・文化的に豊かにすることに大きく貢献した。

クララ・ハーロウ・バートン

「戦場の天使」

1821年12月25日生まれ、1912年4月12日死去

ボンネットに赤いリボン、そして濃い色のスカートという姿で南北戦争の負傷兵を看護するクララ・バートンの姿は、米国民の大半が一度は目にしたことのあるものである。しかし、戦争や自然災害の被害者に対するバートンの献身は、1865年に南北戦争が終わってからも継続した。彼女は、米国赤十字の創設者となり、何十年にもわたって米国政府にこの組織を承認するよう働きかけた。

クララ・バートンは、マサチューセッツ州ノース・オックスフォードで5人きょうだいの末っ子として生まれた。兄たちから乗馬など「男の子のすること」を教えられて育ったが、一方非常に内気な性格で家族を心配させた。大人になってからは数年間教師を務めた後、ニュージャージー州に移り、同州で初めての無料の学校（後の公立学校）を創設した。しかし、女性であるという理由でその学校の校長になることができず、ワシントンDCへ移住した。そこでは米国特許局の事務員となり、男性事務員と同じ給料を得た。これは、政府の職が女性には開かれていなかった当時としては画期的なことであった。

1861年4月12日、南北戦争が始まった。何千人もの負傷兵がワシントンに運び込まれるようになったが、政府にはその対応の準備ができていないことにバートンは気付いた。彼女は、戦場に医療品を運ぶという、前例のないこと（まして女性による前例のないこと）の許可を、1年近くにわたり政府に求め続けた。ようやく許可がおりると、彼女は南北戦争でも有数の激しい戦闘となったセカンドマナサス、アンティータム、そしてフレデリックスバーグの戦いの地へ出向き、兵士たちにとっては看護の「天使」となった。

終戦後バートンは、ジョージア州アンダーソンビルの捕虜収容所で死んだ1万3,000人の北軍兵士の身元を明らかにし、墓石を作る作業を指揮した。彼女は、女性で初めて米国政府の局長（行方不明兵士局）となり、1865年から1868年までの間に2万2,000人の兵士の行方を明らかにした。1869年に、バートンは医



(時計回りに左上から) クララ・バートンの行方不明兵士局を示す標識

(右上) 1884年のバートン
(右下) マサチューセッツ州ノース・オックスフォードのクララ・バートンの生家兼博物館。
糸車の奥に仕事机が見える



師からアドバイスを心得てスイスに行き、1870-71年の普仏戦争の救援活動に参加した。そこで彼女は、戦災者に人道的な奉仕をするために1864年に創設された赤十字の組織の存在を知った。

帰国したバートンは米国赤十字を設立し、1881年5月21日に米国政府はこれを自然災害時の救援組織として承認した。バートンは米国赤十字会長を務め、1904年に引退した。彼女は、米国が1864年のジュネーブ条約に加盟すること、また国際赤十字の加盟国となることに貢献した。バートンはその人道活動によって、ドイツの鉄十字勲章、帝国ロシアの銀十字章、国際赤十字章など多くの表彰を受けている。

クララ・バートンは、メリーランド州グレンエコーの自宅で、90歳で死去した。

ジェーン・アダムズ

社会改革者、人道主義者、平和主義者

1860年9月6日生まれ、1935年5月21日死去

ジェーン・アダムズは、貧しい人々の支援、平和主義、社会改革活動、また進歩的団体の指導者として、国際的に知られていた。そして、米国人女性として初めて、ノーベル平和賞を受賞した。彼女の最も有名な業績は、シカゴでハル・ハウスを創設したことである。ハル・ハウスは、地域の労働階級移民のためのサービスを提供し改革の実験場ともなったセツルメント・ハウスの先駆けとなった。

アダムズは、イリノイ州シーダービルに生まれ、ロックフォード女子神学校を卒業した。1881年に父親が死亡し、自分も背中中の手術をしなければならなかったことから、2年間はほぼ病床についていた。学校時代の友人エレン・ゲーツ・スターとヨーロッパ旅行に出た彼女は、ロンドンでトインビー・ホールというセツルメント・ハウスを訪れた。2人はこの体験に触発されて、1889年にハル・ハウスを設立し、アダムズは亡くなるまでここで生活し働いた。

寄付に支えられて、ハル・ハウスは毎週1万人以上の人々を支援するまでになった。最初の10年間はヨーロッパ諸国からの移民、そして1920年代にはアフリカ系米国人やメキシコ人が対象となった。サービスの内容は、大人のための夜間学校、公共の食堂、ジム、図書館、働く母親のための保育所、労働組合の集会所などであった。アダムズは、国の機関が組織的に活動しない限り、彼女の周囲に存在する貧困はなくなるということを認識していた。彼女は、ハル・ハウスの利用者たちと共に、移民を搾取から守り、女性の労働時間を制限し、労働組合を承認し、初めて少年裁判法を設置し、安全な職場環境を規定する立法を求める運動を進めた。1910年にアダムズは女性として初めて全米社会福祉事業協議会の会長に選出された。

アダムズは、その才能とたゆまぬエネルギーを、女性参政権や政治（1912年の進歩党によるセオドア・ルーズベルト候補指名を支持）などその他の活動にも向けた。また、全米有色人種地位向上協会（NAACP）（公民権運動および反差別運動の有力組織）や米国自由



(上) ジェーン・アダムズは子どもたちへの関心を決して失うことなく、彼らの必要なものを満たすために多くの精魂を傾けた

(右) イリノイ州シカゴのハル・ハウス(1946年7月10日)



人権協会（ACLU）といった組織の創設メンバーとなった。アダムズは11冊の著書に加えて多くの記事を執筆している。20世紀の最初の10年間に国際平和主義運動に関わるようになり、女性平和党の党首に選ばれた。また1915年には、ハーグで国際女性会議の初代議長に選出された。米国が第1次世界大戦に参戦したとき、アダムズは参戦に反対し、米国民の中には彼女を、そして彼女の運動を批判する人たちもいた。

アダムズの多くの実績に対しては数々の賞が贈られているが、中でも特筆すべきは、1931年にニコラス・マレー・バトラーと共にノーベル平和賞を受賞したことである。

ジェーン・アダムズは、シカゴで死去した。ハル・ハウスは彼女を記念する国定史跡として保存されている。

ネリー・ブライ

「米国で最も優秀な記者」*

1864年5月5日生まれ、1922年1月27日死去

エリザベス・コ克蘭は、21歳の時に「ネリー・ブライ」という筆名で記事を書き始め、それまで男性の世界だったジャーナリズムの分野で国際的に知られるようになった。

エリザベス・コ克蘭はペンシルベニア州の小さな町で生まれたが、父親の死後、家族と共にピッツバーグ市に移った。19世紀のフェミニスト運動に反対する記事を読んで怒った彼女は、その筆者を厳しく批判した手紙を「ピッツバーグ・デイスパッチ」紙の編集長に送った。その手紙に強い感銘を受けた編集長はコ克蘭を雇い、彼女は米国における女性記者の先駆けの1人となった。彼女の署名である「ネリー・ブライ」という名前は、ステイーブン・フォスターの歌から取ったものである。

ネリー・ブライは、女性を対象とした記事にとどまることなく、男女を問わず一般の市民に注目し、時には彼らの社会に潜入して、その生活や仕事取材した。工場で働いて、児童労働、危険な職場環境、そして低賃金の実情を実地に観察して記事にしたこともある。彼女の記事の内容に広告主から苦情が出るようになると、上司が記事内容を制限しようとした。ブライはこれに従わず、1886年から87年にかけてメキシコに行き、現地の貧困や汚職についての記事を送った。しかし、この仕事は、メキシコ政府が彼女を国外追放にしたため続かなかった。ブライはピッツバーグに戻ったものの状況に満足できずに別天地を求め、上司に次のようなメモを残した。「ニューヨークへ発ちます。私の活動を期待してください。ブライ」

1887年、ブライは「ニューヨーク・ワールド」紙の記者となり、汚職や犯罪や虐待を暴露する調査報道（当時は「暴露記事」と呼ばれることが多かった）の先駆者となった。彼女は自ら女子精神病院に入り、退院してから、精神病患者に対するひどい待遇を暴く記事で、「ブラックウェルズ・アイランドの精神病院は、人間をとらえるネズミ捕りだ。入るのはたやすいが、いったん入ったら出てこれない」と書いた。



米国郵政公社は2002年9月、ネリー・ブライの業績を称える切手を発行した

ブライの生き生きとした描写、勇気ある暴露記事、そしてそうした記事がもたらした数々の改革にもかかわらず、彼女の最も有名な業績は、ジュール・ベルヌの「80日間世界一周」を再現したことである。1889年11月14日、ブライは新聞社の支援の下に、ニューヨークから2万4,899マイルの世界一周の旅に出発した。そして、72日6時間11分14秒という新記録で地球を一周し、ニューヨークに帰ってきた。この旅は広く報道され、新聞の読者は毎日彼女の進路を追い、ブライは国際的なセレブリティとなった。

1895年にブライは裕福な実業家ロバート・シーマンと結婚してジャーナリズムから引退した。シーマンの死後、彼女は夫の事業を維持しようとしたがうまくいかず、1914年には事業の破綻から逃避するためヨーロッパに移り、「ニューヨーク・イブニング・ジャーナル」紙に第1次世界大戦に関する記事を送った。

エリザベス・コ克蘭・シーマンは、肺炎にかかり57歳で死去した。

* 「ニューヨーク・イブニング・ジャーナル」紙による。

ロサリン・サスマン・ヤロウ

ノーベル生理学・医学賞受賞者

1921年7月19日生まれ、2011年3月30日死去

ノーベル生理学・医学賞、アルバート・ラスカー基本医学研究賞、米国国家科学賞といった極めて権威ある各賞をはじめ、何十もの賞や名誉学位を受けている。同僚のソロモン・バーソンと共同で、ウイルス、薬品、ホルモンなど人間の体の中にある何百もの物質を測定する技術、放射免疫測定法(RIA)を開発した。この発見により、献血の血液の肝炎テスト、ホルモンによる疾患の治療、血液中の異物やガンの検出、そして抗生物質や薬品の効果的な投与量の測定などが可能になった。

ヤロウはニューヨークのブロンクスで生まれ、1941年にハンター・カレッジを成績優秀で卒業したが、当時は女性が物理学者や数学者になることは考えられなかった。しかし、第2次世界大戦で大勢の若い男性が出征したため、彼女はイリノイ大学で物理学の助手になることができた。ヤロウはイリノイ大学物理学部で唯一の女性であり、また1917年以来、同大学で物理を学ぶ最初的女性となった。1943年に学生仲間のアーロン・ヤロウと結婚し、1945年には博士号を取得した。

1947年にヤロウは、ブロンクス退役軍人病院で放射性同位体部門を開設するためにパートタイムで働くことになった。彼女はバーソンと共に放射性同位体を使って、成人発症の糖尿病のメカニズムを研究し、これがRIAの開発につながった。

ヤロウと2人の共同受賞者が1977年のノーベル賞を受賞したが、1972年に死去したバーソンはその中には入っていなかった。ノーベル生理学・医学賞を受賞した女性はヤロウが2人目であり、科学分野のノーベル賞でもわずかに6人目の女性受賞者であった。

ノーベル賞受賞後ヤロウは、著名な先輩であるポーランド生まれの女性物理化学者マリー・キュリー-スキロワの生涯を描いた5回にわたるテレビドラマ・シリーズのホストを務めた。1979年には、



ノーベル生理学・医学賞を受賞した3人の米国人研究者の1人であることを知らされたあとのロサリン・ヤロウ。

1977年10月13日、ブロンクス退役軍人病院にて

エシバ大学アルバート・アインシュタイン医学校の特別教授となったが、1986年には退職してマウント・サイナイ医学校のソロモン・バーソン記念総合教授となり、1991年に定年退職した。

ヤロウは、科学者として、妻として、また2人の子どもの母親として、仕事と家庭のバランスを取ろうとする中で、自分が女性科学者、女性専門職者として先駆者の役割を果たしていることを常に意識していた。ヤロウは次のように語ったことがある。「出世の階段を上る幸運に恵まれた者は、後に続く人たちの模範となる個人的な責任を自覚しなければならない」そして、ノーベル賞受賞式の晩さん会では、権限を持つ者が女性の可能性を過少評価してはならないとして、「世界が、私たちが悩ませている多くの問題を解決するためには、人口の半数が持つ才能を無駄にしてはならない」と述べた。

シーラ・クランプ・ジョンソン

慈善家、起業家、音楽家

1949年1月25日生まれ

シーラ・C・ジョンソンは、ビジネスウーマンであり、ミュージシャンであり、慈善家であり、またアフリカ系米国人女性として初めて億万長者になったと言われている。ジョンソンは、米国でも数少ないスポーツチームの女性オーナーの1人でもあり、女子バスケットボールのワシントン・ミスティックスの社長兼マネージング・パートナーである。その多様な業績について記者にインタビューされたジョンソンは、「私は常に、自分のベストを発揮したいという意欲を持っていました」と答えている。

ジョンソンは、ペンシルベニア州で神経外科医だった父親の娘として生まれ、父から音楽を愛することを教えられた。彼女の最初の夢はコンサートのバイオリニストになることだったが、イリノイ州代表交響楽団のコンサートマスターとなることでその夢を実現させ、さらにイリノイ州全体のバイオリン・コンクールで優勝した。ロバート・ジョンソンと結婚した後はワシントンDCで音楽を教えた。彼女が設立したヤング・ストリングズ・イン・アクションという学生オーケストラは大成功を収め、ヨルダンに招かれて演奏をしたこともある。ジョンソンはヨルダン初の国立音楽学校の設立に力を貸し、その功績によってフセイン国王から同国最高位の教育賞を授与された。

ヤング・ストリングズ・イン・アクションは、1980年にジョンソンが夫と共にブラック・エンターテインメント・テレビジョン（BET）を設立してからは、一家の家計を助ける収入源ともなった。BETは、アフリカ系米国人視聴者を対象とする初めての、そして唯一のケーブルテレビ局である。シーラ・ジョンソンはこのネットワークの法人業務担当副社長となり、彼女が企画したティーントークショー「ティーン・サミット」は、若者がドラッグやエイズなどについて話し合う場を提供し、賞を受けている。ジョンソンによると、BETは、彼女がアフリカ系米国人であるために多くの問題に直面したという。「私たちは、広告主に、アフリカ系米国人も商品を買うのだということを説得しなければなりませんでした」しかし、2000年にジョンソンがこの会社をバイアコム社におよそ30億ド



シーラ・ジョンソン、ゼネラル・モーターズ・グローバル・グループの副社長ゲーリー・コウガー（左）、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア記念財団代表のハリ・ジョンソン・シニア（右）。1963年3月のキング牧師によるワシントン大行進を記録する「Kids for King」プログラムの発足式にて（2005年8月22日）

ルで売却したときには、もはやBETの成功と影響力を疑う者はいなかった。

ジョンソン夫妻は33年間の結婚生活で2人の子どもを育てた後、2002年に離婚した。その後シーラ・ジョンソンは、いくつかの新事業を始めているが、主に慈善活動に関心を向けており、特に子どもの安全と若者のための文化的機会の提供と芸術教育の分野で国際的な活動を続けている。彼女は、黒人大学基金、児童失踪・児童虐待国際センター、いくつかの大学、そして貧しい子どもたちの大学進学を助けるシーラ・C・ジョンソン財団などの慈善団体に多額の寄付をしている。また、パーソンズ・スクール・オブ・デザイン、クリスティー・リーブ財団、十代の妊娠防止キャンペーン、ソレンセン政治リーダーシップ研究所などの組織の理事を務めている。

マヤ・イン・リン

「強く明確なビジョン」

1959年10月5日生まれ

マヤ・リンは、21歳にしてワシントンDCのベトナム戦争戦没者慰霊碑のデザイン・コンテストに優勝し、論争を巻き起こした。彼女は今でも、退役軍人のグループが彼女のデザインを「恥辱の黒い傷」と呼んで非難したときに感じた怒りと苦痛を憶えているという。しかし、当初のそうした批判は、もはや重要ではない。当時エール大学建築学部の学生だったリンの設計した慰霊碑は、米国で最も多くの人たちが訪れる、人気の高い記念碑となり、今では建築の傑作として認められている。何十万もの人たちが、このV字型の黒い御影石の壁に彫られた戦死者・行方不明兵士の名前を読み、触って、感動し慰められている。そうした人たちと、彼らが残していく記念品を見れば、「この記念碑は亡くなった人たちのためのものであり、私たちにっては追憶のためのものなのです」というリンの目標が達成されているということに、誰もが同意するはずである。



(左) ワシントンDCのベトナム戦争戦没者慰霊碑の壁に刻まれた名前を読む訪問者たち



(右) マヤ・リン。ニューヨークのオフィスにて

リンは、オハイオ州アセンズで、中国から移民としてやってきた両親の下に生まれた。最初の著名なプロジェクトとなったベトナム戦争戦没者慰霊碑のほかにも、建築家と彫刻家としての技能を組み合わせた重要な作品を数多く設計している。アラバマ州モンゴメリーの公民権運動記念碑は、壁と平たい円盤から成り、その上を水が流れているもので、彼女はこれを、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの「私には夢がある」というスピーチからインスピレーションを得て設計したという。水を中心的な存在として使ったのは、「われわれは正義が水のように流れ落ち、公正が力強い流れのようになるまで満足することはない」というキングの言葉による。彼女のその他の作品には、テネシー州クリントンのラングストン・ヒューズ図書館、ニューヨーク市のアフリカ芸術美術館、ノール社の「The Earth Is (Not) Flat」というシリーズの家具、そしてエール大学にある記念碑「女性のテーブル」などがある。

リンは、米国芸術・文学アカデミーの賞、大統領デザイン賞、米国建築家協会名誉賞を受賞しているほか、ハーバード、エール、ブラウン、スミス、ウィリアムズの各大学から名誉美術博士号を授与されている。2003年には、世界貿易センター跡地記念碑のデザイン・コンペの審査員を務めた。また2005年には、ニューヨークの全米女性の殿堂に入っている。リンの人生のドキュメンタリー映画「マヤ・リンー強く明確なビジョン」のタイトルは、彼女が記念碑のデザインのプロセスについて語ったスピーチから取ったものである。

リンはインタビューで、彼女の創作に影響を与えたのは、ホープウェル・インディアン人の古墳、日本の掃きならされた砂の庭、そして1960年代・70年代の米国のアースワークの芸術家であると語っている。環境問題に関心の深い彼女は、作品の多くに、リサイクルした材料、生きた材料、そして天然の材料を使っている。

參考資料

書籍

- About America: The Constitution of the United States of America With Explanatory Notes.* Washington, D.C.: U.S. Department of State, 2004.
- About America: How the United States Is Governed.* Washington, D.C.: U.S. Department of State, 2005.
- Addams, Jane. *Twenty Years at Hull House: With Autobiographical Notes.* Dodo Press, 2006.
- American Women: A Library of Congress Guide for the Study of Women's History and Culture in the United States.* Washington, D.C.: Library of Congress, 2001.
<http://lcweb2.loc.gov/ammem/naw/nawshome.html>
- Anthony, Susan B., Elizabeth Cady Stanton, Matilda Joslyn Gage, and Ida Husted Harper, eds. *The History of Woman Suffrage.* Manchester, NH: Ayer Co. Pub., 1979.
- Bly, Nellie. *Ten Days in a Mad-House*, in Cochrane, Kira, Naomi Wolf, and Eleanor Mills. *Journalistas: 100 Years of the Best Writing and Reporting by Women Journalists.* New York: Carroll & Graf Publishers, 2005.
- Caraway, Hattie and Diane D. Kincaid. *Silent Hattie Speaks: The Personal Journal of Senator Hattie Caraway.* Westport, CT: Greenwood Press, 1979.
- Introduction to Human Rights.* Washington, D.C.: U.S. Department of State, 2001.
- Mankiller, Wilma Pearl and Michael Wallis. *Mankiller: A Chief and Her People.* New York: St. Martin's Press, 1993.
- O'Connor, Sandra Day. *The Majesty of the Law: Reflections of a Supreme Court Justice.* New York: Random House, 2004.
- Outline of American Literature.* Washington, D.C.: U.S. Department of State, 2005.
- Outline of U.S. Government.* Washington, D.C.: U.S. Department of State, 2000.
- Outline of U.S. History.* Washington, D.C.: U.S. Department of State, 2011.
- Painter, Nell Irvin. *Sojourner Truth: A Life, a Symbol.* New York: W. W. Norton, 1996.
- Principles of Democracy.* "The Rights of Women and Girls." Washington, D.C.: U.S. Department of State, 2005.
- Roosevelt, Anna Eleanor. *The Autobiography of Eleanor Roosevelt.* Cambridge, MA: Da Capo Press, 1992.
- Roosevelt, Anna Eleanor. *My Day: The Best of Eleanor Roosevelt's Acclaimed Newspaper Columns, 1936-1962.* Cambridge, MA: Da Capo Press, 2001.
- Shapiro, Bruce, ed. *Shaking the Foundations: 200 Years of Investigative Journalism in America.* New York: Thunder's Mouth Press/Nation Books, 2003.
- Stanton, Elizabeth Cady. *Eighty Years and More: Reminiscences 1815-1897.* Boston, MA: Northeastern University Press, 1992.
- Stanton, Elizabeth Cady. *The Woman's Bible.* Amherst, NY: Prometheus Books, 1999.
- Stanton, Elizabeth Cady. *Solitude of Self.* Ashfield, MA: Paris Press, 2000.

ウェブサイト

The Adams Papers

http://www.masshist.org/adams_editorial/

Barton, Clara. National Historic Site

<http://www.nps.gov/clba/>

Barton, Clara. Birthplace Museum

<http://www.clarabartonbirthplace.org/>

Bly, Nellie. *Nellie Bly's Book: Around the World in Seventy-Two Days*. New York: The Pictorial Weeklies Company, 1890.

<http://digital.library.upenn.edu/women/bly/world/world.html>

Lin, Maya. Architecture and Sculpture

http://www.artcyclopedia.com/artists/lin_maya.html

Lin, Maya. Vietnam Veterans Memorial

http://www.greatbuildings.com/buildings/Vietnam_Veterans_Memorial.html

National Aeronautics and Space Administration.

Mars "Sojourner" Rover

<http://mars.jpl.nasa.gov/MPF/mpf/rover.html>

National Women's Hall of Fame

<http://www.greatwomen.org/>

Nobel Prize

http://nobelprize.org/nobel_prizes/medicine/laureates/1977/

Smithsonian Museum of the American Indian

<http://nmai.si.edu/home/>

Sojourner Truth speeches (Note: There are several renditions of her speeches, since most of them were transcribed and edited by others.)

<http://www.sojournertruth.org/Library/Speeches/Default.htm#RIGHTS>

The U.S. Mint. Golden Dollar Coin

http://www.usmint.gov/mint_programs/index.cfm?flash=yes&action=golden_dollar_coin

米国国務省は、上記各資料の内容および入手の可能性については責任を負いません。インターネットリンクは、2013年8月現在、すべて有効でした。

米国大使館 / アメリカンセンター・レファレンス資料室

札幌アメリカンセンター・レファレンス資料室

〒064-0821

札幌市中央区北1条西28丁目 米国総領事館内

Tel: 011-641-3444

Fax: 011-641-0911

関西アメリカンセンター・レファレンス資料室

〒530-8543

大阪市北区西天満2-11-5 米国総領事館ビル7F

Tel: 06-6315-5970

Fax: 06-6315-5980

在沖縄米国総領事館・広報文化課レファレンス資料室

〒901-2104

沖縄県浦添市当山2-1-1

お問い合わせはオンライン質問箱をご利用ください

<http://go.usa.gov/TCsP>

米国大使館レファレンス資料室

〒107-8420

東京都港区赤坂1-10-5

Tel: 03-3224-5292 (レファレンスサービス)

Tel: 03-3224-5293 (来館予約)

Fax: 03-3505-4769

福岡アメリカンセンター・レファレンス資料室

〒810-0001

福岡市中央区天神2-2-67

Tel: 092-733-0246

Fax: 092-716-6152

米国大使館のウェブサイト

米国大使館 <http://japanese.japan.usembassy.gov>

レファレンス資料室 <http://usinfo.jp>

CREDITS:

Credits from left to right are separated by semicolons; from top to bottom by dashes.

Cover design: by Bryan Kestell with photos from:

©AP Images (Hattie Caraway; Hull-House; Sandra Day O'Connor; Clara Barton; Wilma Mankiller; Sheila Johnson; Jane Addams). West Point Museum, United States Military Academy (illustration by Herbert Knotel of Margaret Corbin). USIA (Eleanor Roosevelt; Rosalyn Yalow).

©Bettmann/CORBIS (Nellie Bly). National Portrait Gallery, Smithsonian Institution; gift of the A.W. Mellon Educational and Charitable Trust (Pocahontas). Stock Montage/Getty Images (Abigail Adams). ©Huntington Library/SuperStock (Susan B. Anthony). Courtesy Harvard University Library (Elizabeth Cady Stanton). Library of Congress, Prints and Photographs Division (Harriet Tubman). Hulton Archives/Getty Images (Sojourner Truth). Cheung Ching Ming, courtesy of Many Lin Studio (Maya Lin). Painting of Anne Dudley Bradstreet by LaDonna Gulley Warrick. Gift of Frederik Meijer ©Public Museum of Grand Rapids (Painting by Paul Collins of Harriet Tubman's Underground Railroad).

Page 1: Top row: North Wind Picture Archives; © 1999 U.S. Mint; ©1999-2002 The Illustrator Archive and New World Sciences Corporation; painting by LaDonna Gulley Warrick; painting by Benjamin Blythe, 1766; West Point Museum, United States Military Academy, illustration by Herbert Knotel; Library of Congress, Prints and Photographs Division. Second row: Hulton Archives/Getty Images; Library of Congress, Prints and Photographs Division; courtesy Harvard University Library; Library of Congress, Prints and Photographs Division (2); ©AP Images (2). Third row: ©AP Images (2); USIA; Bettmann/Corbis; Copyright Nobelstiftelsen; ©AP Images; Cheung Ching Ming, courtesy of Maya Lin Studio.

Page 2: North Wind Picture Archives; © 1999 U.S. Mint. 3: National Portrait Gallery, Smithsonian Institution, gift of the A.W. Mellon Educational and Charitable Trust. 4: MPI/Getty Images. 5: © 1999-2002 The Illustrator Archive and

New World Sciences Corporation; painting by LaDonna Gulley Warrick. 6: North Wind Picture Archives. 7: By kind permission of the Vicar and Churchwardens of St. Botolph's Church. 8: portrait by Benjamin Blythe, 1766; illustration by Herbert Knotel, West Point Museum, United States Military Academy. 9: Stock Montage/Getty Images. 10: illustration by Herbert Knotel, West Point Museum, United States Military Academy. 11: Library of Congress, Prints and Photographs Division; Hulton Archives/Getty Images. 12: MPI/Getty Images. 13: Hulton Archives/Getty Images; gift of Frederik Meijer © Public Museum of Grand Rapids. 14: Library of Congress, Manuscripts Division. 15: courtesy Harvard University Library. 16: © Huntington Library/SuperStock. 17: Library of Congress, Manuscripts Division; ©AP Images; Photograph No. 208-PU-167G-18PHE (Photographer Harris & Ewing) Records of the Office of War Information, Record Group 208; National Archives at College Park, College Park, MD; ©AP Images (2). 18: FPG/Getty Images. 19: ©AP Images. 20: United Nations. 21: ©AP Images (2). 22: ©AP Images. 23: ©AP Images (2); Bettmann/Corbis. 24: USIA; Courtesy Washington Mystics; Cheung Ching Ming, Courtesy of Maya Lin Studio. 25: ©AP Images (3). 26: ©AP Images (2). 27: United States Postal Service. 28: USIA. 29: ©AP Images. 30: U.S. Department of State, Kenneth E. White; ©AP Images.

Executive Editor: George Clack

Managing Editor: Mildred Solá Neely

Art Director/Design: Min-Chih Yao

Writers: Mark Betka, Paul Malamud, Chandley McDonald, Mildred Solá Neely

Photo Research: Maggie Johnson Sliker, Kenneth E. White

Advisor: Historian Susan Ware, editor of *Notable American Women, A Biographical Dictionary*, 2004

編集・発行 米国大使館レファレンス資料室(2013年9月)

本冊子の日本語文書は参考のための仮翻訳であり、正文は英文です。



U.S. DEPARTMENT OF STATE
Bureau of International Information Programs